魔法少女リリカルなのは×Sleep days

舞台裏の黒衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは×Ｓｌｅｅｐ　ｄａｙｓ

【Ｎコード】
Ｎ６６６３Ｘ

【作者名】
舞台裏の黒衣

【あらすじ】
この小説は。

主人公の銀が、微妙な勇気と、無駄な方向へのやる気と、昼寝（睡眠）を持ってどこまで突っ走れるかという実験的な物となっている気がします。ご了承ください。

また理不尽な謎展開や理解を超えた理論、支離滅裂な会話も含まれる気がしないでもありません。ご了承ください。

この小説は作者が掲載中の『魔法少女リリカルなのは×Ｓｉｌｖｅｒ　ｅｙｅｓ』のＩＦとなります。ＩＦというよりはパラレルワールド的な物かもしれませんが、ご了承ください。

本編ではありえないであろう話を掲載していくつもりなので、もし興味がありましたらお読み頂けると大変嬉しく思います。ただ、色々とお気を付け下さい。

また、人を選ぶネタがある時もあるとも思われますので、お気を付け下さい。

タイトルを【もしもの物語】から【Ｓｌｅｅｐ　ｄａｙｓ】に変えました。なんというか、こちらの方がらしい気がします。

第一壊　『もしもＳｉｌｖｅｒ　ｅｙｅｓにシリアス要素が一切なかった場合』

すいませんでした＞（＿　＿）＜（猛虎落地勢）

このシリーズは、本編の荒筋をじっくり考察した結果、しばらくほのぼのを書けそうにないことに絶望した作者が暴走してしまったため生まれてしまったバグで御座います。
お読みになられる場合はお客様方の自己責任で、用法、用量を守って正しくお読みください

第一壊　『もしもＳｉｌｖｅｒ　ｅｙｅｓにシリアス要素が一切なかった場合』

「はっ…はっ…はっ…はっ…」

今、朝日がまぶしい歩道をジョギングしている私は５歳のごく一般的な女の子♪

強いて違うところをあげるとすれば家族が翠屋ってお店を経営してるってとこなの……

名前は高町なのは

そんなわけで通り道にある公園の前までやって来たの！

――海鳴臨海公園

一般的な公園よりかなり大きいこの公園は、整備もしっかり行き届いていて……なにより海沿いの通路を走るととっても気持ちがいいの！

ジョギングするのにもぴったりで、疲れた時ややむを得ない状況に陥った時にもベンチに座って休憩することができてとても便利で、わたしはいつもここをコースに入れているの♪

やむを得ない状況――っていうのは、そもそもわたしが今ジョギングをしていることにも関係してくるの……

場面転換中……

わたしの家族はお父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、そしてわたしの5人家族

みんなみんな、とーっても仲良しなの！

特にお父さんとお母さんは凄くて、たとえ接客中でも甘々空間を放出するから、無糖の飲料系のオーダーが引っ切り無しに飛び交っているの！

そんな幸せな日々にひとつの転機が訪れたの……

お父さんが入院することになっちゃったの！

え？　重症？　ううん、ただの腰痛なの……お母さんの話だと、プロレスごっこをしていた時に頑張りすぎたって話なの

それを聞いてお兄ちゃんとお姉ちゃんの顔が真っ赤になってたけど、わたしにはよく意味がわからなかったの……聞いても教えてくれないの

そんなことがあって、今高町家はとても大忙し！　翠屋の経営にお父さんの介護で、お母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも大忙し！

え？　お父さんの介護は必要ないんじゃないかって？　でもお母さんは毎日欠かさず病院に行ってるの！

「おかげで入院期間が延びてしまいそうだよ。これは参ったな……ハハッ！」ｂｙ，父

なんだか今電波が走った気がしたけど、あんまり気にしないの

わたしも最初は翠屋のお手伝いをしようとしたけど、わたしの弱点がそれを許さなかったの……それは【運動神経　Ｅ－】（魔力ランク的表現）

注文の品を持っていこうとしたらこけてお客様にストライク

慌てて謝罪と、汚れたお洋服を布巾で拭こうとするとまたこけてお客様にツーストライク

更に慌てて貼り付いてお客様のお顔の形が浮き出ている布巾を取ろうとして足が滑り鳩尾に痛烈なタックルで止めのスリーストライクのバッターアウトなの！お客様の意識もブラックアウトなの♪

場面転換中……「つ、ツッコミを入れて欲しいの……」……

事実上戦力外通知どころか、お邪魔虫にしかならないわたしは結果

的にお店を追い出されたの……でもわたしはへこたれないの！

その日からわたしはウォーキングを、慣れてきたらジョギングを毎朝欠かさずするようになったの

血反吐（鼻血）を吐きつつトレーニングを重ねた結果、今では１０分に一回のペースでこけるようになったの！　昔の１０秒に一回ペースに比べると飛躍的な進歩なの♪

もうそろそろ翠屋にリベンジしよう……そう心に誓ったわたしなの

「……あ」

ふと見ると、ベンチに一人の男（の子）が座っていたの

（うにゃっ！！　いい男（の子））

どうやらお昼寝中のようなの……朝からお昼寝なのかとかそういうツッコミは厳禁なの！　お昼寝は全ての常識を覆すの！

ベンチにはお日様の光が降り注いでとても気持ち良さげだけど……ここは海沿いだし潮風が寒いと思うの。特に今は１２月。よく眠れるの……

「……ハッ！？」

そんな事を思っていると突然その男（の子）は目を開き、わたしの目を真っ直ぐ見つめてきたの……

そしてわたしの見ている目の前でツナｇ……ではなく、ベンチの横に置いてあるボストンバックのファスナーを下し始めたの…！

『ジッジー……（ファスナーを下ろす音）』

そしてあるものを取り出すと、わたしに分かるようにその手に持ったものを広げて……毛布？　ま、まさか！？

「（昼寝を一緒に）やらないか」

「――――――」

そういえば、この公園はお昼寝場のベンチがあることで有名なところだったの

お昼寝に弱いわたしは男（の子）に誘われるままホイホイとベンチに――

「……にゃっ！？」

あ、危ない所だったの……もう少しで誘われるままホイホイとお昼寝しちゃうところだったの！

で、でもその手は食らわないの！　わたしは今翠屋にリベンジという崇高な目標があるの！　そ、そんな見え見えな誘いに誰が釣られ

「よろしい。ならば膝枕だ」うにゃーーっ♪

――その日、わたしにお昼寝仲間（ともだち）ができました――

これが少女、高町なのはと奇妙な魔法（デバイス）の杖との出会い

Ｓｉｌｖｅｒ　ｅｙｅｓにシリアス要素が一切なかった場合　―

完？―

第一壊　『もしもＳｉｌｖｅｒ　ｅｙｅｓにシリアス要素が一切なかった場合』

反省はしています。しかし後悔はしていません。でも公開はして…
…あ、いえすいませんどうかそのお手に持たれた石をお投げにならないで下さい；；

第二壊　『主人公が壊れていない？いいえ、やっぱり壊れてます』（前書き）

相変わらず壊れているこのシリーズ

ちなみにこちらでは主人公は壊れておらず

また、性格もどこか緩く、というか壊れております

……あれ？結局壊れてる？

第二壊　『主人公が壊れていない？いいえ、やっぱり壊れてます』

前壊までの荒筋！

おひるねテクニック

なのはホイホイ

以上！

俺はデバイスである。名前はまだない

別にネタではない。本編でまだ出ていないだけだ

別にメタではある。だがここでは関係ない

さて、少し前を回想してみようか

俺は親代わりの二人との喧嘩の果てに家出したデバイスだ

喧嘩の内容は……まぁ、簡単に言えばメイドロボットとパイルバンカーって所か

訳が分からなくてもそれが仕様だ、我慢してほしい

まぁそんなこんなで家を飛び出した俺は一人気ままな一人旅と洒落込んだ

そんなある日、見つけた公園

素晴らしい。まさにその一言に尽きる

日差し具合、風通し、眺め、全てがパーフェクトだ

そんな昼寝スポットを見つけた俺は、寝ることが大好きなのだが、とある事が原因で眠ることができないのである

そう、それはずばり人だ

もっと言えば人の温もりとでも言おうか

何？どんな都合のいい原因だって？

知らなかったのか？　ご都合主義からは逃げられないのだよ

ああ、今更ではあるが、この小説は人を選ぶネタ、メタ発言、素晴らしきご都合主義、作者のやりたい放題、史上最強の昼寝成分で溢れておりますので、ご注意ください

って偉い人が言っていた

もっと簡単に言うと

んまっ（こんな小説）　つぁ（で）　ちょぎっ（大丈夫か？）　という事だ。分かったかな？　何でもありって事だ

話を戻そう

そんな訳で俺は今睡眠を求めている

かれこれ……あれは、一万年と二千年前からだったか

まぁそんな昔という訳ではないが。ああ、いま【愛してるぅー！】と思った人、ありがとう

このノリに付いていけない人はこの先生きのこれないぞ。今の内に小説を閉じることをお勧めする

まぁ２００年ほど前って所だな、前に寝たのは

さて、今現在ベンチに座り目を閉じているわけだが、もちろん眠れるわけがない

寝れなくともこうやってのんびりするのは好きだが、やはりぐっすり眠りたいというのが本音である

どうするか…と悩んでいると、一人の少女が向こうから走ってくるのが分かった。センサーって便利だな

そんな少女が―おそらくは俺の前付近―で止まる。ふむ、視線を感じるな

目を開けてみてみると、少女が驚いた様子でこちらを伺っているのが見えた

見える、見えるぞ……俺の無駄に高性能で無駄のない無駄な観察眼が少女の隠された本性を暴き出す

奴もまた昼寝道に堕ちたものか…くくく、丁度いい

そんな事を考えた俺は、脇に置いてあったボストンバックから毛布を取り出すと広げて見せる

ビクリと反応する少女、小さく、しかしハッキリと聞こえる気がする声で囁く

「（昼寝を一緒に）やらないか」

少女はその言葉を聞き、放心したようにこちらに近づいてくる…後3、2、1歩……お、止まった

どうやら最後の抵抗をしているようだが、この自称昼寝王を舐めて貰っては困る。昼寝せずして何が王か！

膨大な数の並行思考（マルチタスク）が唸って光る。少女（おまえ）を陥落（たおせ）せよと閃（かがや）き嘯（さけぶ）く！

「必殺（シャイニングトラペゾヘドロン）よろしい。ならば膝枕だ」

その日の昼寝はとても充実したものとなった

第二壊　『主人公が壊れていない？いいえ、やっぱり壊れてます』（後書き）

やはり息抜きは必要ですね

気分がすっきりしていると執筆速度が上がる気がします。当社比で

それでは、また次回で……あるのかなぁ？

第三壊　『夢の中の戦い？』（前書き）

相変わらず緩く、暴走気味の第三壊です

メタ、ネタ等色々混ざっておりますのでご注意ください

それではどうぞ

第三壊　『夢の中の戦い？』

前壊までのあらすじ

時は新暦６１年１２月２１日、世界は争いの渦の真っ只中にあったなんて事はなく、割と平和で平凡であった

そんな時代を生きるデバイス―銀―は、公園で不思議な色合いの瞳を持つと少女、高町なのはと出会う

その出会いは偶然か、必然か……その運命の出会いから、物語の歯車は少しずつ回り始める気がする

今ここに、昼寝場所を探して世界を巡る冒険の旅が始まる―――――わけが無い

高町なのはと銀が出会ったその日、久しぶりに充実した睡眠（ひるね）を堪能している銀は不思議な夢を見ていた

故郷にある自身のお気に入り出会った場所、そのベンチになぜか幼ｚｙ……ではなく少女が寝ているという夢であった

状況が分からない彼は首を傾げつつも、その少女の横に座り眠り始め――夢の中でも眠るのかこいつ

「どこであろうと関係ない……眠るためだったら俺は大統領の前でだって寝てみるさ。でも母親だけは勘弁な。　居ないけど」

地の文に突っ込まないでいただけますか

とまぁ、夢の中で眠ろうとしていた彼はなぜか自分の傍にあったボストンバックから毛布を取り出すと、それに包まりつつ欠伸をかます

「ふぁぁ…。ご都合主義様々だな……ああ、ボストンバックの中は毛布と掛け布団と枕、あと天蓋付きベッドが入っているぞ……ｚｚｚ」

見事に寝具ばかりだがそれでいいのだろ――ｏｉ　ｍｉｓｓ　ミス　おい待て、最後の一個はなんだ明らかに無理があるだろ聞いてんのかおい

「そういうロストギアなんだよきっと……完成度たけーなおぃィ…ｚｚｚ」

そうですかありがとう寝言凄いですね。あとネタ混じってますよ

隣に座る少女と腕が触れ合ってるせいか、割とすぐに眠りに落ちていく銀

辺りには二人分の寝息が聞こえるのみ。なんとも平和な光景であった……のだが

「うぅ……ん」

「ｚｚｚ……んあ？」

隣で眠る少女が無意識にか、毛布を掴み自分の方に引き寄せ、包まってしまう

しばらくしてそれに気づいた銀が、寝ぼけ眼――元々半眼の目付き悪いのが更に細められているためとても凄い事になっている状態――で隣の少女を見る

「……ふっ、こんなこともあろうかと」

そんな台詞を吐きつつボストンバックから二枚目の毛布を取り出す

再びそれで身体を包み、寝なおそうとして――

「…にゅうふふふふ……」

何か楽しげな夢を見てらっしゃるのか、怪しげな寝言を吐きつつ更に毛布も持って行かれる幼女、もとい少女様。それを見る銀

「……く、くくく。面白い…その勝負、受けて立つぞ、名も知らぬ少女よ！」

その少女の様子を見て、闘志に火が点いたのか。テンション高くボストンバッグから次々毛布を取り出す銀……2、4、6、10……どんだけ出てくるのだろうか。　そしてそれら毛布を次々とその御身に巻きつけていかれる少女様。こちらもこちらで恐ろしい

「まだまだ戦闘力（もうふちから）が上がるだと……面白い、面白いぞ！」

「にゅふ～（ごろごろごろ）」

「全部か？　全部欲しいのかこのいやしんぼさんめっ！」

暫くの間辺りには、そんな楽しげな声が響いたという

おおよそ１０分後

「……ま、まさか本当に全部持っていくとは、この海のリハクの目をｒｙ」

「す～…す～……ふっ」

そこには手持ちの毛布計６１枚を全て持っていかれ茫然としている銀と、それらを全て身体に巻き付け尚も眠り続ける少女の姿があった。というか今笑わなかったか謎の少女Ａよ

「……やれやれ」

呆れたような声を出しつつもどこか嬉しげな銀。そんな彼の視線の先には、毛布に包まれて幸せそうに眠る少女の姿があったとかなかったとか

（ま、今回は譲るか……昼寝を普及させるのもまた昼寝王（自称）の仕事だ）

そう思うことにして彼もまたベンチに座り、再び眠り始めるのであ

った――――

「す～……んにぅ？…　な、なにこれぇ！？　暑い！狭い！暗ぁ～～い！？　だ、誰かヘルパス、ヘルパス・ミィー！！！！」

「ヘルプ・ミーな」

銀のお昼寝仲間（ともだち）がまた一人増えた！　　気がしないでもない

続くのかもしれない

第三壊　『夢の中の戦い？』（後書き）

今回のネタは友人に言われた一言にて急きょ入れることになりました

簡単に言ってしまえば、この小説の主人公との共通点？が色々あった事ですね

自分は〇魂見たことなかったので、友人に指摘された時は結構驚きました

それでは、この様な小説をお読み頂き有難うございました＞（＿）＜

第四壊　『突撃！　隣の高町家！』（前書き）

久しぶりに外伝でございます。こっちを書くのは時間掛からなくていいですね、ええ

相変わらずな感じですが、よろしければどうぞご覧くださいな

第四壊　『突撃！　隣の高町家！』

前壊までの荒筋

現実でなのはと昼寝を楽しんでいた銀。だがその時彼は夢の中で

（中略）

始まるのだ！……何？適当だって？その辺は勘弁してほしい

何故なら今の俺は、そんな事を呑気にしている暇など無い…おっと

「ええい！　避けるなぁっ！！」

「避けたくて避けるのではない。避けてしまうのだよ、これがな」

「意味の解らない事を！！　さっさと観念してこの刃の錆になれ！」

さて、何故こんな事になっているのかと言うと――回想入りまーす

遡る事割と結構前

遠くからカラスが鳴く声が聞こえて、俺は意識を覚醒させる

どうやら熟睡していたらいつの間にか夕方になってしまったようだ。

うむ、いい昼寝だった。堪能した

妙な夢を見た事が気になると言えば気になるのだが、まぁ夢だから

あまり深く気にしても意味ないと結論付け、体を――

「おっと、そうだったな」

現在膝の上には静かに眠る少女がいる。その緩みきった顔はとても

幸せそうだ

（起こすのは忍びないが……まぁ、あまり遅くなってしまってはな。

少女にとっても都合があるだろうし）

心を鬼にして、とまで大げさな事でもないのだが。少女を起こすた

めに体を揺する

「ん～……にへ～♪」

む、これでは逆効果か？　仕方がない。我が拳にて目覚めるがよい……ふぅぉぉぉぉっ！

「ほあたぁっ！！」

「うみみゃあっ！？」

秘孔って便利だよな

「起きたか」

「うん、思わず気持ち良すぎて熟睡しちゃったの…。足、痺れてない？」

ごめんね？と謝りながら自己紹介をしてくる少女。高町なのはと言うのか

「俺は……えーと……ああ、うん。銀、とでも呼んでくれ」

超法規的措置によってそう決まった。という事にしておこう

「ギン君だね！　よろしくなの」

「ああよろしく高町。ところでいいのか？　もう結構遅い時間だが」

「なのはでいいの。　ってもうこんな時間なの？……そろそろ帰らないと」

辺りが夕暮れに包まれている光景を見て少し焦る少女、もといなのは。俺はそんななのはの様子を見つつ

「そうか。それではまた今度一緒に昼寝でもするか……さて、今日は何処で一晩過ごすかね」

最後はボソッと呟いたのだが、それを聞きとがめたなのはが驚いたように聞いてくる

「…ギン君ってお家に帰らないの？」

「ん？……まぁ帰らないというか、帰れないというか」

何せ世界が違うからなぁ。そうホイホイ世界を越える訳にも……今更な気もするが

そうはっきりと言う訳にもいかないので適当に誤魔化しつつ説明すると、何か勘違いしたのか、目を潤ませてこちらを見てくるなのは

「そ…そっか。ギン君大変だったんだね」

「……何か盛大に勘違いされてる気がしないでもないが。まぁ、そういう訳だ」

勘違いを訂正するのも面倒だったので「じゃあ、闇系の仕事があるので、これで」と言いつつ去ろうとしたのだが

「……なのは。ナデオリドルディオ゛ヅカンディヅンディスカ？（訳文：何故俺の腕を掴んでるんですか？）」

「大丈夫だよギン君！　わたしの家族…ううん、お父さんお母さんに言えば住む所の問題も無くなるよ！」

ついでに戸籍も一発なの。とか恐ろしい言葉が聞こえた気がするが、それはあれじゃないのか？偽造という――

「ま、待てなのは！　俺は一人でだいじょう……うお！？　力強い、力強いよこの子！？　え？　身体能力チートスペックな俺に勝つ力ってどんだけだよって待てやめろ引きずるなぁ！」

ぎゃー人攫いーー！

目の前にそびえ立つ……と言うのは大げさなれど、一般的な家庭よりは上であろうお洒落な和風の家を前に、俺となのはは立っている

「ここがわたしの家だよ♪　おかーさーん。ただいまー！」

「……」

元気よく家に入っていくなのはを見送りつつも、俺はこれからどうするか考えていた

このまま逃げてしまおうか？　うーむ、しかしそれではお昼寝仲間（ともだち）としては相応しくない……はっ！？

ドスッ！

脳裏に独特の効果音と共に光が走った瞬間、素早くその場から一歩分下がるとほぼ同時に足元に何かが刺さる……木刀？

レーダーの索敵範囲を広げてみるとここから北西方向、１０ｍ程離れた所に反応……誰も居ない…いや、上か！

「……」

電柱（そこ）の上には月を背に腕を組みＪ〇Ｊ〇立ちする人影が！　え？

伏字の意味が無い？　やってみたかっただけさ

まぁそれはともかく……性別＝男。年齢＝１５，６付近。容姿＝◎。

なるほど理解した

「なんだ、ただの変態か」

ずるっ！と電柱の上から謎の襲撃者（笑）が滑り落ちるのが見えたが、ざっくり無視

「ギン君〜！　お母さんが入ってきてだってー」

「ぬ……分かった。今いく」

「ちょ、ちょっと待てぇ！」

何か叫んでいた気もするが無視だ無視。お昼寝（なのは）仲間を待たせるわけにはいかないからな

さて、所変わって現在高町家リビング。ソファの空いてる場所、なのはの隣に座らされて、なのはの母親、高町桃子さんと対面しているわけだが……

「ニコニコ」

「……え？」

「やっぱりギン君も驚いてるの…」

うん、まぁ驚くよな普通。母親と紹介された人が２０代前半に見え

る美人だったらさ……いや、下手したら１０代でもいけるかこれ

「あらあら。若々しい美人さんだなんて、ギン君ったらまだ小さいのにお世辞がお上手ね♪」

ぬ、声に出てたか？　まぁ満更でも無さそうだし、実際そうなので否定する必要もないか。というか真面目に母親なのだろうかこの人

「……失礼ですが、お年は……？」

「２９よ。でも女性に年齢を尋ねるのはあまり良い事ではないわよ？」

「ハッ！失礼致しました！」

ビシッと背筋を伸ばして敬礼する。横から「キャラが全然違うの」なんて聞こえるが気にするな、俺は気にしない

そんな様子を見てあらあらと笑っているのはの母親であらせられる高町桃子さん。口元に当てた手が大変優雅にございます

いかんいかん、空気に飲まれかけている……そう思い頭をぶるんぶるん

「うにゃっ！？髪が、髪が当たるの！」

「あ、すまん」

それを見てますます笑みを深くする桃子さん。和やかな空気が流れる……ああ、平和ｄ――

「いい加減俺を無視するのはやめないか…？」

後ろからぬぅっと表れる男……ああ、さっきの変態か

「変態ではない！　高町恭也、高町家の長男でなのはの兄だ！」

「ところでこのお茶、なんていう名前の茶葉だ？　やたらめったら美味（うま）いんだが」

「これは玉露（ぎょくろ）って名前よ～。貰い物だけれどね♪」

「ああ……ああっ！？　これがかの有名な玉露…！？」

「日本茶より紅茶のほうが好きなの……」

「あらあら。なのはは甘い方が好きだものね」

「ふむ、子供だな」

「む～！　ギン君もでしょ」

「ぬがぁぁぁぁぁぁっ！！」

五月蠅（うるさ）いな……俺は今この玉露を堪能したいというのに

仕方ないので目だけそちらを向けて話しかける

「それで、さっきから何の用だ？」

「貴様、なのはとどういう関係だ？」

「どういうって……なぁ？」

そう言ってなのはの方を見ると、なのはは元気よく頷いて

「うん！　一緒に寝たお昼寝仲間（ともだち）だよ！」

「お約束をありがとう」

笑いしか出てこないね――ネタをありがとう的な意味で

「い…い…、一緒に、寝た……だと？」

「なんだ、羨ましいのか？」

「ああ……いや、違う！　いや違わな……ではなくてだ！　貴様、なのはと一緒に寝ただとぉ！」

そう叫んで手に持った木刀を振り下ろしてくる。だが見えているぞ小僧！

懐…ではなくボストンバックから素早く得物を取り出すと木刀と交差させる

――――ぼふっ

得物と得物がぶつかり激しい音を――出すことはなく、気が抜けるような音が辺りにひびく

「な……俺の斬撃を止めた…？」

「なんで枕なの…？」

そう、俺が取り出したのは枕。寝る時のお供として欠かせないあの枕だ

「寝る時も闘う時も、こいつがあれば一安心。それが枕と言うものだ！」

「絶対に違うと思うの」

「ぐ…偶然だ！　こんな変な奴に小太刀二刀御神流が敗れる筈が――！？」

突如、凄まじい圧力を感じた

なのはの兄、恭也もそれを感じたのか動きを止める――なのはは気付いてない？　いや、こいつ現実逃避してやがる！

それはともかく、圧力、もとい圧迫感の方向に視線を向けると

「ニコニコ」

相変わらず笑顔がふつくしい桃子さんのお姿が。だが先程とは出ているオーラが違う

ほんわかした辺りを優しく包むようなものから、じんわりと辺り一帯を徐々に締め付けていくような、そんな――

「恭也、ギン君」

「「はい！」」

思わず息ピッタリで返事をしてしまう。俺と奴の嫌そうな視線がぶつかり合うが今はそんな場合ではない

「運動するなら、道場でね？」

「「りょ、了解しました！！」」

こうして俺たちはすたこらさっさと道場へと走って行った……逃げだしたとも言うか

拒否権など無い。あの笑顔はそれだけの強制力がある

この日俺は、「笑顔とは本来攻撃的な～」の意味を身を持って実感したのであった

後編へつづ……え？　後編あるの？

第四壊　『突撃！　隣の高町家！』（後書き）

まさかの後編……ヨソウガイデス

第五壊　『突撃！　隣の高町家～後編～』（前書き）

いつもは大体２０００文字付近でまとまるのですが……

本当に予想外ですね、ええ

それでは、後編をどうぞ

第五壊　『突撃！　隣の高町家～後編～』

さて、そんなこんなでやってきました高町家ＩＮ道場……って、道場？

「え？　なんで一般家庭に道場あるんだ？」

「俺の親父が小太刀二刀御神流と言う流派の師範で、それの鍛錬等の為建てたらしい」

「おおう、なんかえらくカッコいい名前出てきたな……ん？　それってさっきお前が言ってた…」

「ああ、俺は親父からその流派を教わっている」

「ほー…親子で武術やってるのか……これはまた」

準備運動をしながらそんな事を話してくる恭也。真面目だなぁ

「ギン君は……何してるの？」

「何って…準備運動ならぬ準備昼寝」

「昼寝に準備とかあるの？」

「いや、準備運動に対抗して今作ってみた。なかなか悪くないな」

「ただ寝てるだけだもんね」

「いやぁ、これは一本取られたな」

はっはっは……はっ！？

ドスドスドスッ！

「不意打ちとは……器が知れるな小僧！」

「真面目にやれ！　というか誰が小僧だ！！」

いやだって俺、実年齢遥かに年上だからな？　あ、やば、これネタ

バレだった？　まぁ今更か

しょうがないなぁ。とぶつくさ呟きながらボストンバックから取り出す枕、その数５つ

それをお手玉の要領でジャグリングする。ついでに足でも３つ程同じことをしている

「うーむ。昼寝したお蔭か、まだまだ行ける気がする……絶好調だな」

「地味に凄いが真面目にしろと……ああ、いやもういい」

「ギン君器用なの～」

失礼な。真面目にしてるんだよこれで

そんな事をやっていると道場に入ってくる人影――その数二つ

「あらあら。なんだか賑やかねぇ」

「恭ちゃーん、応援しに来たよ～……ってわわっ！　なんか凄い事してる子がいる！？」

おや、見知らぬ人が一人……雰囲気が恭也に似てる事から兄弟か何かだろうか？

そう思いつつジャグリングしていると桃子さんが紹介してくれる

「ギン君は初めて見るわよね？　この子は私の娘の……」

「高町美由希で～す。　君がなのはが連れてきた友達君？」

「ああ、銀だ。苗字は無い……それと友達ではない。お昼寝仲間(ともだち)だ」

「…えーっと、何か特別な意味があるの？」

「いや、特に何も」

「あ、あはははは……」

あー、これは恭ちゃん苦手なタイプだ～。とか言ってるが特に気にせず準備運動(ジャグリング)を終える。恭也の方はとっくに終わっていたのか、こちらを見て佇んでいる

「すまない、待たせたか？」

「ふん、まったくだ……」

「おいおい、そこは嘘でも「今来たところさ（キリッ　」って言うべきだろ」

「……何の話をしているんだ貴様は…」

ガックリと肩を落とす恭也。うーむ、反応が返ってくるっていいな

気を取り直したのか、ビシッと二刀――あの長さは小太刀か――を構えて名乗ってくる

「まぁいい……小太刀二刀御神流、高町恭也……いざ、参る」

おお、カッコいい名乗りだことで……これは負けてはいられない！

無駄に対抗心を燃やしつつボストンバックから取り出したるは――

毛布

「よかろう……ならば俺も名乗らねばなるまい。我が名は銀！」

それを肩に掛け――宛(さなが)らマントのように纏うと、枕をその辺にまき散らしつつ名乗り返す

「そしてご覧の通り、貴様が挑むのは無限の枕。夢見の極地！　眠らずしてかかってこい！！」

ずるぅっ！　と恭也と、視界の端で美由希がこけているのが見えたが気にしない。だってなのはと桃子さんはなんか楽しそうだし

「隙ありぃ！」

「なっ！？　き、きさ――」

ぼふぅっ！　ぼふっ！　ぼふんもっふっ！！

間髪入れず投げた3つの枕が全弾顔に命中する。というかあれだ、無駄に【！】を付けてみたけどやっぱり迫力に欠けるな

まぁいいさ。俺と枕(おまえ)ならどんな奴にだって勝てる――そうだろ？

「枕が喋るかぁぁぁあ！！！」

「ツッコミありがとうっ！」

ぼふぅぅぅっ！！　と気の抜けた音を辺りに振りまきつつ俺の得物（枕）と恭也の得物（木刀）がぶつかる。そのまま鍔迫り合い（？）をしつつ相手の出方を伺う俺と恭也

「くっ…！　こんなふざけた奴なのに隙が無い…！？」

「当たり前だ。この枕は低反発素材かつ個人個人に合うように調整することもできる。更にさらに、安眠できるように安らぐ香りをお届けするのだ。隙があってたまるものか」

「そういう意味ではなぁぁい！！」

「解って言ってるのさ！」

「貴っ様ぁぁぁぁぁぁ！！！！」

俺と恭也、二人の間に斬撃と……枕撃？の軌跡が描かれ、幻想的（シュール）な光景が広がっている。と思う。いやだって俺見えないし

「恭ちゃんがあれだけ喋ってる…というより叫んでるの、初めて見た気がする」

「わー……手元が全然見えないの…」

「あらあら、元気ねぇ」

暫く、馬鹿正直と言ってもいいくらいに真正面から攻撃の撃ち合いを続けていた俺と恭也だったが――む、恭也の雰囲気が変わった？

そう思った瞬間――その姿が掻き消える様に居なくなり、俺の視界から消える。　あくまでも“視界”からだが

「もらっ――た！？」

「真剣枕取りぃ！」

ぼふっ

やっぱり音でいまいち決まらないが、いつの間にか後ろにいた恭也から放たれた一撃を二つの枕で挟んで受け止める

「正直その速さは驚嘆物だし、称賛に値するが――馬鹿正直に後ろから攻撃していては意味が無いですからぁ！　残念っ！」

「し、神速がっ！？　いや、それよりも貴様……二度も俺の剣を取ったな…！　親父にも取られた事なかったのにっ！」

「ハハッ」

枕から木刀を引き抜き、後ろへ飛んで離れる恭也。それを見ながら俺は自慢げにこう言い放った

「これが、本当の“寝取り”というものだっ！！」

「なん…だと…！？」

「ねとり？」

「いや、違うからねそれ！？　なのはも知らなくていいからね！」

俺の言葉に何やらショックを受ける者二人と意味が解ってない者が一人――はっ！？

警報が鳴り響く。後方から凄まじい殺気……こ、これは…！？

おそるおそる振り向くと、そこには素敵な笑顔の桃子さん――の御手が目前にぃ！？

「こ、これは……アイアンクロー！　というか俺が接近に気付かなかっただと！？　レーダーなにやってｎ――」

ガシィッ！！

ええい、高町家は化け物か？！　なんて言っている場合では無い。掴まれている部分――頭が軋み、猛烈な痛みと恐怖が俺を襲う

そのまま宙吊りにされるが、意識が遠のいていく俺は力を込めることができず脱出もままならぬまま――

「不適切な発言は、めっ♪」

言ってる事は可愛いのですが、やってる事が恐過ぎて皆引いてますよ

その言葉が実際に口から出ることはなく、ゴキンッという鈍い音と共に俺は意識を失った

おお、しゅじんこうよ。しんでしまうとはなさけない

続くのかはわからない

第五壊　『突撃！　隣の高町家～後編～』（後書き）

大体ネタになると壊れてらっしゃる恭也さん。本来は無愛想で無口（Ｗｉｋｉ）らしいですが、アニメだとクールなナイスガイだったかと。結構喋ってた気がするので。まぁ登場話数自体が少な目なのですが

それでは、お付き合い頂いてありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6663x/

魔法少女リリカルなのは×Sleep days

2011年11月17日18時23分発行